◇談話会要旨◇

太平洋圏に於ける人類の将来に関連する問題点

渡辺　光

第13回太平洋学術会議（1975年Vancouvar）は中心課題を「太平洋圏における人類の将来 Man's Future in the Pacific」に置いて開かれた。その地理学部会で私は"Geodiversity or the problems related to mankind's future in the Pacific"と題する報告をthe Pacific Communityグループで発表したが，この要旨を報告して責を塞ぐことにする。因に内容は同時に発表された英国ロンドン大学のFisher, C. A教授のThe Idea of a Pacific Communityと期せずして一致する点が多かつたので，質疑討論は両者の報告後一括して行なわれた。

かってある外人が「アジアは一つである」といったそうである。これは文学的乃至心情表現ならば差支えないが，事実は，自然的にも文化的にもアジアほど異質的の地域から成るばかりでなく，それら各地域の相互の紐帯が弱い大陸はない。このことは太平洋圏については更に顕著に当てはまる。ここではWright, J, Kのいうところの Geodiversityが最も明瞭な形で現われている。

ただ，自然的の立場からは，これを構成する各地が夫々の地域性を包蔵しつつも，太平洋という世界最大の海盆によってある種の統一性を持っているということは認めてよい。この海域は気候帯，風系，海水の移動などに関して系統的統合的な配置構造が見られることは，大気や水が流動体であることから当然である。またその周縁を繞っての環太平洋造山帯の存在も，この海盆に自然的統一性を与える一要素である。

然し，人文方面では，どの要素をとってみてもあまりにも多彩である上に，不統一であり，圏内の相互関連も薄い。その上この400年来に互って欧米に対して各地域毎に別々に従属的であり，このことが統一性，一貫性の欠如の大きな原因となった。Pacific Community, Pacific Unity などの表現はいわば一部の理想主義者の現実離れのした希望的表現にすぎない。

この短かい報告30分間の中で，太平洋圏各地の将来に関するGeodiversity の問題をもれなく包含することはできないので，次の5地域に絞った。内容は私が1966年以来9年間に亘って委員長をしていた太平洋学術協会のScientific Committee on Geographyの委員諸氏からよせられた成果が大部分である。

(1)東南アジアは，域内の地域差は大きいが，自然的には湿潤熱帯の地であること，人文的には複合社会（Plural society）を構成していることを共通点とする。しかし，この古代体制下の社会に欧米の植民地化の残した押印は，旧宗主国の植民政策により異なるものがあり，それが第二次大戦後の独立獲得後の各国の変貌様相及び将来に異なる見通しを与えている。南北問題は喧しいが，徒らなる経済援助や，大規模開発は効果を結ぶものではなく，却って賄賂，腐敗，非能率等を通して社会不安の原因となることを，委員の1人Gary, R. 教授は指摘した。

(2)オーストラリアの将来に立塞がる大きな問題は，著しい淡水の不足である。試みに温帯で天水畑作農を営むに足りるとされる年500㎜弱のところは東南部の山地と西南端である。この一角に1000万をわずかに越す人口が集中し，統計数字の上からは第1次，第2次，第3次産業のバランスのとれた産業態勢が保たれているようではあるが，都市，農業，工業用水を賄うに足りる淡水を如何にして獲得するかが将来の問題である。因に広大な鑽井盆地の地下水は1914年に既に限界に達し，今は減少の一途をたどっている。なお，ニュージーランドも，オーストラリアと共に一見将来発展の余地を多く残している様であるが，農牧的土地利用は既に安定した限界に達し，工業化にはその致命的ともいうべき国内市場の狭隘の障害がある。

(3)太平洋上の無人島については，Wiens H. J. 教授によって報告された。これらは「絶海の孤島」のもつイメージとは逆に，自己のアイデンティティーを保持することに対しては著しくぜい弱で，世界の政治，経済の情勢を鋭敏に感受する。これの一時占居の理由は燐鉱・鳥糞採取・軍事・航空基地使用等である。

(4)南米太平洋沿岸諸国，これらは日本以外の太平洋圏諸国とはほとんど関係なく，人文地理学的見地からは大西洋圏Atlantic Realmに属するといっても過言ではない。このことはスペインの植民地以来の伝統であり，米加両国との関係といっても，パナマ運河を経由しての大西洋北岸地帯との結びつきを主とする。

(5)アングロアメリカと日本

以上事例として挙げた地域は太平洋圏全域と緊密な相互関係は持っていない。これらと異なり，米加日の三国は全太平洋圏に対する相互依存関係があり，その将来の懸るところも大きい。特にその中でも日本は全くの太平洋国家であり，その命運は太平洋圏と共にあるという特殊の位置にある。

(注)Fisher教授及び私に対する質問として中華人民共和国の将来と太平洋圏におよぼすことのあるべき影響についての意見を求められた。これに対する両人の回答もほぼ同一であった。それは，(1)中華人民共和国の内情はかなり不明で予期し得べき将来についてすら，予測は困難である。(2)過去の事例に徴するに，歴代シナは陸地（西方）指向型で，太平洋指向性を示したことはまれである。(3)近い将来にも太平洋圏に大きな影響を及ぼす勢力として現われることはないのではないか，ということであった。

（1976. 1. 17）

都心からの時間距離圏について

メッシュ法による調査

瀬戸玲子

1.地域メッシュの設定とメッシュデータ

地域メッシュは市町村より小さくかつ面積的に大小の少ない統計表章の地域単位としてとり上げられ，昭和49年，行政管理庁告示によって「統計に用いる標準地域メッシュ及び標準地域メッシュコード」が定められた。標準メッシュは正方形のメッシュが得られる平面直角座標系，UTM座標系によるものではなく，経緯度に基くものとしたが，理由は地形図の囲郭線が経緯度であること，全土に